

\*\*\*\*\*

一部50円です

\*\*\*\*\*

## 行き倒れ地蔵

この「芥川だより」を発行して間もない時に書いた「夜道」を読んだ親しいOさんが、「私、夜道を読み出したら怖くなって身震いしそうになったわ」と言われたことがある。彼女の話によれば田舎へ帰省する道中、いくたびか襲われた重苦しい靈感を思い出し怖くなって読めなくなったという。ご主人が運転される車で郷里に向かう途中、峠にさしかかると頭や肩が急に重たくなり、胸が締め付けられるようになった。不思議に思って車を止めてあたりを見まわしても変わった様子はない。その時、彼女は昔の旅人が峠で息絶えた靈魂の仕業ではないかと考え、持っていた食べ物とお茶を道端の小石の上に並べてお祈りをした、すると重苦しく感じていたものがすっと消えたそうです。それから、同じ道を通るたびに峠では車を止めお祈りし昔の人の弔いをするようになった。今ではほとんど靈感らしきものを感じることは無くなってきたと話された。



この話を聞いて家の近くにあったお地蔵さんを思い出した。その地蔵さんは、古い山道を少しばかり登ったところにあった。車道から小道を登ってお堂を回りこむように進むと薄暗い竹藪の中に入る。道はさらに細くなり坂となって地蔵さんの前を通過して谷筋を這うようにして隣村まで続いていた。地蔵さんは、行き倒れになったという人を祀っているらしいと母は言っていた。あたりには大きな竹が生い茂り、春先には筍が生えてくる竹林である。

道を竹の葉が落葉となって積もり滑りやすくしていたが危険な箇所ではないので、私は行き倒れの人があったと聞き不思議に思ったものだ。お堂から少ししか離れていない地蔵との距離や、もう少し歩けば村の人家にたどりつき休息できたのにと子供心に考えたのである。

Oさんの話を聞きながら、村人が大事にお供え物をして永く祀っていた訳を何となくわかったような気がした。行き倒れた人の事情は知らずとも、無念にも行き倒れとなった人の霊を弔って災いを避け、村人を守ってくれる有難い地蔵に祀り上げることによって村人の平穏を守ろうとした知恵だったのではないかと思うようになった。今度、田舎に帰った時には、あのお地蔵さまにお参りして花でも供えてこよう。

連載 爺捨て山 39

梵店主

知り合いの医師がいう「いまだ、医療は発展途上にあるから、わからないことも多い」「最後は、運だね。運がよければ助かるし悪ければ助からない」

素人の私でも素直に納得できる言葉だ。ある先輩は「ガンの出来る箇所が一センチ違っただけで生死を別けることがある。一人は助かり、一人は亡くなった」と友人の話をした。

しかし、こんな話しも聞いた。乳がんが移転しリンパ腺に進行中であると平気な様子で話される女性は、がんを医師から宣告された時に、動揺する事なく平静だったが、家族は動揺した。

大病院の婦人科病棟は、がん患者が多く、定期的に行う抗がん剤投与の関係上、患者同士が仲良くなって、毎月病棟ホールで開催されるコンサートには百人程が集まって三時間も演奏が続く、二次会へとながれ明け方まで楽しまれるとか。

彼女いわく「今、楽しまなければ明日はないかもよ? そう思うから盛り上がるわよ。女は強いね。男は、籠もってしまうから弱いわね」

この開き直る強さが、運を呼ぶのではないだろうか。



「T先生も本に書いてはるけど」と、姉と話していて、その名前が出ないことは一回も無い、といつてもいいぐらいなのだ。真つ当かという、それが全然違うのでおかしいのだが。濃厚で真つ当、というのは、T先生のキャラである。元高校の校長先生で、かつてはセミナーを北海道から沖縄まで全国各地で開いていて、姉は、多分、そのほとんどに出席していた。アメリカでのセミナーの際は、「怖いから、ついて来て」と夫同伴。T先生のセミナーに、姉がいくつぎ込んだか、いまとっては不明だ。

義理とはいえ家族だから、義兄に直接、聞きたいと思うこともあるのだが、こちらは事実を姉に隠している可能性があった、「キヨズミ兄さんに電話、代わつて、もしもし、義兄さん、どうなんですか？」というわけにもいかない。以前、入院中に「骨に、ひよつとしたら」と診断されたとき、義兄は「このことは言えないよ。(姉が)可哀そうで」と病室のベッドでしきりに鼻をかんでいたことがあった。私は、たまたまお見舞いに行つて、そういう場面に遭遇してしまつたのだが、あまりにも義兄が気の毒で、何も言えなかつた。それっきり、義兄も何も言わないので、今も、そのことを姉に話しているのかどうか、わからない。姉は「いつも、わざわざ病院に骨の注射に行つてんねん。せつかく、ガンは

「T先生がこう言うてはつた」に出来ない同士であることが判明した。それ、姉はそれどころじゃなくなつていた。定期健診で、義兄の腎臓にカゲが見つかり、医者が「切つてしらべましょう」と言つた、というのだ。転移？という不安が一瞬、よぎつたが、「どうも、そういうものではないらしいねん」。義兄の病状、治療方針の話になる。姉の話は突然、あいまいになる。姉は自分の考えを押しつけたので、「たいしたことないのに、切りたがるねん、あそこは、そういう病院やねん、アンタも知つてるやろ」みたいな言い方で、実状がイマイチ、わからない。

なにしる、姉は「人間の体にメスを入れる」ということに反対なのだ。「ロクなことがない」と言つている。そりゃ、ロクなことじゃないだろうし、入れないで済むなら、その方がいいに決まつているが、姉のような一方的な嫌い方は、ちよつとどうかと思う。

実は、このことにも「先生が絡んでくる。先生が、メスは入れない方がいいですよ」と言つた、と姉は言うのだ。私は、T先生の信望者ではないが、姉に本を渡され、セミナーにも行つたことがあるので、先生のことを少しは知つている。エホバの証人でもあるまいし、「手術や輸血をダメ」なんて金輪際、言う人ではないことぐらい、わかつて

「T先生も本に書いてはるけど」と、姉と話して、その名前が出ないことは一回も無い、といつてもいいぐらいなのだ。真つ当かという、それが全然違うのでおかしいのだが。濃厚で真つ当、というのは、T先生のキャラである。元高校の校長先生で、かつてはセミナーを北海道から沖縄まで全国各地で開いていて、姉は、多分、そのほとんどに出席していた。アメリカでのセミナーの際は、「怖いから、ついて来て」と夫同伴。T先生のセミナーに、姉がいくつぎ込んだか、いまとっては不明だ。

義理とはいえ家族だから、義兄に直接、聞きたいと思うこともあるのだが、こちらは事実を姉に隠している可能性があった、「キヨズミ兄さんに電話、代わつて、もしもし、義兄さん、どうなんですか？」というわけにもいかない。以前、入院中に「骨に、ひよつとしたら」と診断されたとき、義兄は「このことは言えないよ。(姉が)可哀そうで」と病室のベッドでしきりに鼻をかんでいたことがあった。私は、たまたまお見舞いに行つて、そういう場面に遭遇してしまつたのだが、あまりにも義兄が気の毒で、何も言えなかつた。それっきり、義兄も何も言わないので、今も、そのことを姉に話しているのかどうか、わからない。姉は「いつも、わざわざ病院に骨の注射に行つてんねん。せつかく、ガンは

「T先生も本に書いてはるけど」と、姉と話して、その名前が出ないことは一回も無い、といつてもいいぐらいなのだ。真つ当かという、それが全然違うのでおかしいのだが。濃厚で真つ当、というのは、T先生のキャラである。元高校の校長先生で、かつてはセミナーを北海道から沖縄まで全国各地で開いていて、姉は、多分、そのほとんどに出席していた。アメリカでのセミナーの際は、「怖いから、ついて来て」と夫同伴。T先生のセミナーに、姉がいくつぎ込んだか、いまとっては不明だ。

義理とはいえ家族だから、義兄に直接、聞きたいと思うこともあるのだが、こちらは事実を姉に隠している可能性があった、「キヨズミ兄さんに電話、代わつて、もしもし、義兄さん、どうなんですか？」というわけにもいかない。以前、入院中に「骨に、ひよつとしたら」と診断されたとき、義兄は「このことは言えないよ。(姉が)可哀そうで」と病室のベッドでしきりに鼻をかんでいたことがあった。私は、たまたまお見舞いに行つて、そういう場面に遭遇してしまつたのだが、あまりにも義兄が気の毒で、何も言えなかつた。それっきり、義兄も何も言わないので、今も、そのことを姉に話しているのかどうか、わからない。姉は「いつも、わざわざ病院に骨の注射に行つてんねん。せつかく、ガンは

「T先生がこう言うてはつた」に出来ない同士であることが判明した。それ、姉はそれどころじゃなくなつていた。定期健診で、義兄の腎臓にカゲが見つかり、医者が「切つてしらべましょう」と言つた、というのだ。転移？という不安が一瞬、よぎつたが、

「どうも、そういうものではないらしいねん」。義兄の病状、治療方針の話になる。姉の話は突然、あいまいになる。姉は自分の考えを押しつけたので、「たいしたことないのに、切りたがるねん、あそこは、そういう病院やねん、アンタも知つてるやろ」みたいな言い方で、実状がイマイチ、わからない。

なにしる、姉は「人間の体にメスを入れる」ということに反対なのだ。「ロクなことがない」と言つている。そりゃ、ロクなことじゃないだろうし、入れないで済むなら、その方がいいに決まつているが、姉のような一方的な嫌い方は、ちよつとどうかと思う。

実は、このことにも「先生が絡んでくる。先生が、メスは入れない方がいいですよ」と言つた、と姉は言うのだ。私は、T先生の信望者ではないが、姉に本を渡され、セミナーにも行つたことがあるので、先生のことを少しは知つている。エホバの証人でもあるまいし、「手術や輸血をダメ」なんて金輪際、言う人ではないことぐらい、わかつて

「T先生がこう言うてはつた」に出来ない同士であることが判明した。それ、姉はそれどころじゃなくなつていた。定期健診で、義兄の腎臓にカゲが見つかり、医者が「切つてしらべましょう」と言つた、というのだ。転移？という不安が一瞬、よぎつたが、

幸せに長生きしなさいや」、そんなことを言いそうな先生なのだ。だけど、セミナーか何かで先生が、ひよつと口にしたことが、姉の心と響き合うと「先生も言うてはった」と金科玉条、鉄の掬みたいになる。

ある時、私たちの母親が「T先生って、一体、何を教えてくれてるんだらう」とぼやいたことがあった。「人間は、すべて意識、エネルギーだということ」と答えることもできたが、それを言っても母がさらに混乱するので、「何のこと？」と聞いたら、T先生の教え子の△子さんが自分の母親のお葬式をしなかった、という話を、さも当然のように姉から聞かされた、と言う。T先生の教えだか何だか知らないが、前から、うちの姉は一切の法事、葬式、墓参りをポイコットして生きている。

この春にやった私たちの父親の三十三回忌にも顔を出さなかった。目と鼻の先に住んでいるのに。ついでに言うると、弟の嫁と高校受験の息子（私たちの甥だ）もパス。こちらは、「塾がある」「塾に行かせているので」という理由だった。姉は変ではないか。私が、「姉ちゃん、何でやのん？」と聞くと、「そんなに悲しそうに言わんといて。私の生きざまやから。もし、三十三回忌に行ったら、いままでT先生に学んできたことが、無になつてしまう」とまで

言うではないか。「どういふことやのん！」と叫んだら、「それは、T先生の本を読んで、としか言われへんわ」ときた。ほんまに、むかつく姉とT先生である。(つづく) AO



汚染される環境と人体 14

## 低血糖症

山彦彦彦

「砂糖は脳の栄養です」と時々ラジオのCMで流れます。砂糖の消費を促すための業界のCMですが、これほど誤解を招いて危険なものはないでしょう。確かに脳は、その活動として砂糖が分解したブドウ糖（グルコース）しかエネルギーとして使うことができません。ですが、砂糖の大量摂取には大きな落とし穴があるので、それが機能性低血糖症。

機能性低血糖症は糖尿病の前段階とも言えるものです。大量に摂取した砂糖によって上昇した血糖値を正常値に下げするために私達の体は膵臓からインシュリンを分泌します。その機能が疲弊し低下して血糖値を抑えられなくなったのが糖尿病。その前段階として、人によっては高血糖に対し大量にインシュリンを分泌しすぎて血糖値が正常

値の半分近くまでに急激に下がって、その状態が長く続くのが機能性低血糖症なのです。この状態は今の医師の間で知る人は少ないのです。そして精神疾患の巨大な背景になってしまっているのです。

現在でも医師の間では低血糖症（機能性なしの）は、インスリンノーマ（膵臓ガンの一種でインシュリンが過剰に分泌される）や糖尿病でインシュリンを過剰に注射してしまった時のものとしか捉えられていません。そしてその治療は砂糖やブドウ糖を摂ればよいとされてきました。しかし機能性低血糖症の場合、それは全く逆で、インシュリン過剰分泌の影響で低血糖が現れているところに更に糖分を摂れば、一時的に血糖値は跳ね上がりますが、直ぐに更なるインシュリンの分泌を促し低血糖の状態を再現してしまうのです。甘いものの好きの皆さんは次のような症状はありませんか。

「疲れやすい・不眠・集中力がない・イライラが続く・気分が塞ぐ・感情を抑えられない・頭痛・神経過敏・不安・恐怖感・めまい・拒食や過食。次第に常態化して悪化すると感情がコントロール出来なくなるばかりか、発作的に泣く・暴れる・精神錯乱・幻聴・幻覚・自傷行為・自殺観念などの顕著な精神症状」

脳におけるエネルギーのブドウ糖不足によって脳の活動が不安定化しま

す。そして私達の脳や体はブドウ糖不足の危機的な状態から抜け出すためにアドレナリンを分泌するのです。アドレナリンはそのような生理活性物質としても働きますが、神経伝達物質でもあり、交感神経を刺激して脳神経や体の活動を亢進します。攻撃的で活動過多ないわゆるキレた状態と疲れて不安な消耗した状態を繰り返すのです。これが機能性低血糖症の潜伏した恐ろしさなのです。

日本でこの病態に現場で最初に気付かれたのは、犯罪心理学者の岩手大学名誉教授大沢博氏です。大沢教授は長年少年犯罪者のカウンセリングに従事していました。するとその少年や少女達がいわゆる両親の不在の食卓の「孤食」で、コーラなどの飲料やインスタント食品ばかり飲食していることに気付きました。そして調べていくうちに機能性低血糖症に出会ったのです。石川啄木の悲哀に満ちた詩、その裏には食事さえ満足に摂れない貧困と極端な飲酒によって引き起こされた低血糖症が背景にあることにも気付かれませんでした。

大沢氏が訳された『栄養と犯罪行動』（アレキサンダー・G・シャウス著）には、シャウス氏が犯罪者収容所で糖制限食に替えたところ所内での暴力事件が半減したことを伝えておりま

す。如何に砂糖にまみれた飲食物が世の中の犯罪の背景にぼぼしているかは恐るべきものがあります。

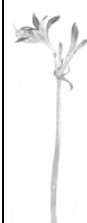
以来大沢氏はこの機能性低血糖症を発見しているカナダ発祥の分子矯正医学(Orthomolecular medicine)の普及に尽力されてきました。

千葉の柏崎良子医師は長年自律神経失調症や鬱病に苦しんでこられました。大沢先生に出会って、その教えから分子矯正医学を学び自らを治癒した医師です。HPを作りテレビに精力的に出演し機能性低血糖症や分子矯正医学の普及に頑張っておられます。東京では溝口徹医師がその治療にあたっております。是非有用な情報入手してください。

アメリカ環境医学のセロン・ランドルフ医師は砂糖の害として機能性低血糖症の他に「依存型の砂糖アレルギー」を指摘しています。残念ですが、分子矯正医学を実践されている日本の医師の間でさえ、今それは知られていません。上で述べた症状の中にそれが重複して実は含まれています。また糖類の過剰摂取は腸内の悪玉菌の好餌となりカンジタ・アルビカンスの増殖に繋が影響を及ぼし、腸壁に穴をあけて「漏れやすい腸症候群(リーキー・ガット・シンドローム)」の原因となります。食物アレルギーが大量に体内に侵入する大

きな原因となります。ご注意ください。

元に戻って例えるなら、私達の脳や体は石炭や木片を燃やして動く蒸気機関なのです。そこに一気に爆発燃焼するガソリンを投げ込んでいるのが、機能性低血糖症の状態なのです。ガソリン(砂糖や精製された穀物)ではなく有機玄米などの全粒穀物をゆつくりと噛んで食す昔ながらの食生活が機能性低血糖症防ぐありふれた予防法なのです。



### わが沖繩考 1

具志晩学

渡来人との混血は極小だったがために、本土人と沖繩人との間に、人体学的な差異が生じたのは仕方があるまい。だからといって、(日本人とはもとも別の民族)と判断するのは、単細胞的思考だ。

本土縄文人が渡来文化の洗礼を激しく受けつつ進化していく間、沖繩縄文人は無為に暮らしていたはずはない。ずっとあとになって興る琉球王国の素地は、その期間に育まれて、あの小さな島で、世界史の中でも特異な文化が華開くことになる。(今でこそ、日本に属しているものの、かつては「琉球」というまったく別の国が存在していた)

た)と、岩中氏は単純に断定する。

しかし本土でも、古代国家成立以降、統一されない限り、方々に別々の国が存在していたのだ。

信長、秀吉、家康に至って、漸く全国統一されたが、琉球だけは、地の利を得て、薩摩の島津氏の侵攻まで、一国の形態を維持し得たのである。(「略」蝦夷、「略」熊襲も、かつてはヤマト民族とは別の民族として認識されていたが、長い歴史の中で同化されてしまったため、いまでは誰もそんなことは思いもよらないことだろう。だが厳密に言えば、どちらも別の民族であった。)かくの如く岩中氏の単細胞的思考は止どまることを知らない。

岩波講座『日本通史』第一巻『日本列島と人類社会』(岩波書店)の埴原和郎氏の文章を引用させて頂く。「筆者の研究の結果ではアイヌも沖繩人も縄文人を祖先とし、その基層的要素において本土人と同系であるといわざるを得ない。」

注意すべき点は、一般に「アイヌは本土人に追われて北海道へ逃れた」といわれ、多くの人がこれを信じていることである。また沖繩人についても逃亡説を説く人がいる。しかしアイヌや沖繩人の祖先は縄文時代から北海道または沖繩に住んでいたのであって、本土人に追われて逃げたのではない。」

### 米国時代 5 (78年12月~84年1月)

土田 裕

#### 米国の都市

東海岸の都市の中でもボストンは騒々しくなく欧州の伝統を感じさせる町であった。ある夏、家族でボストンに2泊し、レンタカーでリゾート地のケープコッドの町々を回った。海に面して別荘が沢山あり、米国の上流階級の優雅な生活を垣間見る思いであった。エドワード・ケネディが秘書と一緒に車で落ちたというチャップクイデックにも行った。

米国の中小企業の本社は殆どが地方都市にあり出張は飛行機と車を乗り継いで行く。更生タイヤの大手で三井物産が代理店をしていたバンダグ社はアイオワ州のマスカティンという小都市にあり本社へ行くのに半日がかりであった。人口1万人位の小さな田舎町なのでホテルも多くなかったが本社の隣にホリデイインがあり廊下で繋がっていたのは便利であった。広大なアメリカでは同じ時期に夏と冬が同居しているので驚いた。一九七八年二月、着任して暫く経った頃、シカゴからラコスタというサンディエゴ郊外のリゾート地へコンヴェンション出席のため出張した。シカゴを出るときは零下十五度Cなので厚手のコートを着ていたがラコス

夕へ到着したら二十度Cでホテルの客も半そで、短パン姿で闊歩している。

当初は移住の自由が保証されているアメリカで、過酷な気候の北部、中西部に何故これだけ多くの人が住んでいるのか不思議に思った。暫く経ってアメリカは移民の国なので元々の出身国と似た気候の土地に住み着く傾向があることが分かった。

例えばシカゴにはポーランド、アイランド系が多いがいずれも欧州では寒冷の地である。シカゴの北にあるウイスコンシン州の町にはドイツ人、オランダ人が多く住んでいてワインやビール工場を創業している。一方、温暖な気候の西部、ロサンゼルス、サンディエゴなどはヒスパニックといわれる中南米の人が圧倒的に多い。

更に東部、中西部に人口が多いのは主たる産業（東部は金融、商業、中部は自動車、鉄鋼など）が集中している雇用機会が圧倒的に多いという事情もある。シカゴ駐在時は客先がいなかったのでフィラデルフィアへ行く機会はなかったが、四年前に初めて市内観光をした。建国二二〇年あまりの若い国だけに独立記念館や自由の鐘などを巡るツアーがあり案内の役人がトーマスジェファースン等が独立宣言を書いた部屋を誇らしげに説明していた。欧州の建築物の豪華さと比べると、歴史

が新しく市民革命でできた国だけに独立記念館もいかにも質素であった。

### 米国大統領

私がシカゴに着任した時の大統領は民主党のジミー・カーターであった。

一九七六年に当選し、対ソ連・中国融和政策を進めていたがうまくいかず、共和党からは弱腰外交と非難され、人氣も下降きみであった。一九七九年二月イラン革命が成立し、イラン国王が米国の亡命したのでイランとの関係が悪化、一月にはイランのアメリカ大使館人質事件（イラン革命派が大使館員五〇数人を人質にしてパーレビ国王のイランへの送還を要求）一九八〇年四月には救出作戦を敢行したが、米軍ヘリコプター二機が接触、砂漠に墜落し失敗、超大国アメリカの評判はがた落ちとなったが結局七月にはパーレビ国王が出国して四カ月ぶりに人質は釈放された。この事件をテレビ・新聞で見てアメリカが政治的にも経済的にも没落しつつあることを痛感した。一九七九年三月にはスリーマイル島原発の事故があったがマスコミもそれほど大々的に報じることもなく、私も深刻な問題とは認識していなかった。一九八〇年十月には共和党のロナルド・レーガンが勝利して、米国の威信回復のために次々と手を打ち、景気も急回復

した。この間、日本の総理大臣は大平正芳（一九七九—八〇）鈴木善幸（一九八一—八二）中曽根康弘（一九八二—八七）と変わったが、アメリカに居てマスコミで取り上げられたのは中曽根さんだけで、テレビの有名な報道番組六〇ミニッツで当地のキャスターと堂々英語でインタビューに応じていたのを覚えている。他の総理も訪米されたことはあったと思うがマスコミで取り上げられたことは一切無かった。米国大統領は日本の首相と違って最低四年間は続けるし絶対的な権限を持っているので、偶々出来の悪い人が大統領になると国全体がおかしくなる。カーター大統領の時代がそうであったと思う。

銃世界のアメ리카では大統領といえども常に危険にさらされていて、国民的人気のレーガン大統領ですら、就任後間もない一九八一年三月、銃撃されて一命を落としかけた。彼は歴代大統領の中では最も高齢（六九才）で大統領に就任していたが驚異的な回復力を見せ三週間後には現場復帰した。大統領選挙は民主・共和両党の予備選挙から始まり約一年の長期戦なので大変な資金が必要であるが、全てが個人・企業の寄付金で賄われている。選挙権のない私のところまでレーガン陣営から寄付金の依頼が来たのには驚いた。

### 鯖寿司

京都では、祭や正月のようなハレの日に鯖寿司をつくる。いまはスーパーでも簡単に手に入るの、家庭でつくることはほとんどないが、よく食べられることに変わりはない。生活の中心が京都にあった頃は僕もよく食べたものだ。好物の一つである。

現在暮らす信州では、鯖寿司は手に入らない。どうしても食べたいのならば、専門店に注文するか、自分でつくる以外ない。俺は自分でつくることにした。

はじめは真空パックのしめ鯖でつくったのだが、酢がききすぎていたり、どうも味ががない。新鮮な鯖を仕入れて、しめ鯖からつくることにした。

海のない信州では新鮮な鯖は手に入らないだろうと思われるかもしれないが、一軒だけ角上という魚屋がある。新鮮な鯖が毎朝店先に並ぶのだ。

これまでに角上で仕入れた鯖で、三十本以上の鯖寿司をつくったが、満足いく出来にはとどいていない。塩や酢でしめる時間を調整したり、昆布だしをきかしたり。シウガ汁を加えたり、といろいろ工夫している。

連休前につくった鯖寿司は、いままでになく「これはうまい！」とうなった。五月に入つてすぐ、この「うまい」鯖寿司を手土産に、豪雪地帯の木島平に住む知人を訪れた。フキノトウを採るためだ。（猿）

リハビリ5

『五十肩』は難病である。原因が分かっていないのだ。

肩関節の骨や軟骨、靭帯、腱などが老化して起こると考えられている。しかし、三十〜四十代で患う人もいる。また、一生かからない人もいる。

治療法は硬くなった関節や筋肉を揉み解すこと。私の場合で約一年かかるとの診断である。人によっては数年かかる場合もあるし、治らない場合もある。この病気は痛みを伴う。それも良く分かっている。夜中になると患部が疼く。医者には「なぜ夜中なのか、分かない」という。リハビリ師によると眠ると筋肉が弛緩して患部を引っ張るためらしい。痛みを抑えるため、寝る前に湿布を貼る。しかし、その効き目が三時間しか保たない。夜中に一、二度、目覚めては湿布を貼り替える。熟睡できないので、寝不足の日々が続く。

「予防法はないんでしょうか」と医者に尋ねてみた。

「ないんです。原因が分からないので対策が打てないんです」との答えだった。『自分の体のことぐらい自分で分かっている』と思っていた。奢りだった。人体は人智で計り知れない謎のようだ。

《龍》

あの世の話とある読書感想文(3)

大江雉兎

前世だの、来世だの、魂の永遠だのと続けていると妙な気分になる。前回、前々回とこの手の話をやってしまったので、そろそろぶん投げの潮時とも思うが、もう少し頑張らねばならないようだ。この手の話を受け入れることで気持ち晴れる人が少なからずいるらしいからである。他人様が何を信じようとしてそれぞれの勝手だし、信じた結果、救われた気になるのなら、たいへん結構なことだ。しかし、論法が非科学的でありながら、大上段に「科学」を振りかざして信じさせているとすれば、他人事でも警報の一つを鳴らすぐらいは許される。ハナっから科学にあらず、宗教だと宣言しているのなら何ら問題はないが、科学だの、学術性だのと強調するがゆえに構えざるを得ないのである。

十九世紀から二十世紀にかけて、著しい進展を遂げた自然科学が直面したのは、宗教との関係をどう整理するかという問題だった。教育者としても名を残したアメリカの外交官、A・D・ホワイトは科学と宗教の関係を *Warfare* と表現した。『科学と宗教の闘争』というタイトルに訳された著書には、自然

科学の各分野と、その前に立ちほだかっていた宗教的観念の相克が描かれている。だが大切なのは、科学が敵対せねばならなかったのは宗教一般ではなかったという点である。「私は、この戦いを『科学と教条的神学』との闘争である、と当時も信じていたし、いまもそう確信している」とは、ホワイトが序文に記した一節である。立ち止まって批判する目を持たず、権威らしきものを鵜呑みにしてしまう発想が本当の敵だったのである。聖書をよりどころに、科学的な知見を敵視するばかりか、高圧的なセクシヨナリズムをも生む風潮こそが戦うべき相手だったのである。

こうしたドグマティズム(教条主義)は、演じる役者を変えて現在にも続いている。反論すると面倒なことになる程度の思惑から上位者にすり寄るのも、卑近なドグマティズムだが、科学の問題でいうなら興味深い現象が起きているようだ。それは、ある主張に「科学的」とのレッテルが貼られただけで、検討もなくその説を信じ切ってしまう風潮があることである。「〇〇がメタボに効果大と学者が言った」などの話が情報番組で流れたりすると、その学者の発言が本来はどういう内容だったかを問うより早く、スパーの棚からその食材が姿を消してしまふ……これなどは科学によるドグマティズムだろう。ホワイトの時代と

比べるなら、陣営を変えて科学がドグマティズムの方へ移ってしまったのである。さながらアナキン・スカイウォーカーがダース・ベイダーとなったようなものだ(ここでBGMに「帝国のマーチ」!)。

『生きがいの創造』で、筆者の飯田氏が意図してドグマティズムをコントロールしているとは思いたくない。しかし同書に掲載されている感謝の手紙(同書の前身である論文「生きがいの夜明け」に対するもの)のいくつかには、ドグマティズムに害されているのではないかと読めるものもある。それだけに『生きがいの創造』はけっして科学的な書ではない、もし寄る辺を求めるとなら宗教としての信仰心からそうすべきであるということを、声を大にして言いたいのである。

来世や魂の永遠をめぐる議論は、もとよりテーマ自体が心の深奥部に響きやすい。死を考へることは生きることを考へるに等しいとは、よく聞く文言だが、死を経験したことのない人には建前にしか響かない。一方、ひとたび死を経験することが思考の完全消滅を意味するとすれば、この文言は永遠の建前論であると。ここでノンフィクション作家の柳田邦男が息子の脳死に向き合った時の経験を綴った『犠牲(サクリファイイス)』が思い起こされる。そこでは死を

めぐる三つの相が示される。「一人称の死」「二人称の死」「三人称の死」という視点である。自らの死と、常にどこかで起きていた誰かの死は議論にはなるまい。だが死には身近な人を失い、残される悲しみが峻烈な痛みとなる「二人称の死」もある。生身の肉体を持つ私たちがいつ経験してもおかしくないのが「二人称の死」なのである。痛みの処方箋として、発想法や生きがい論が求められる理由もそこにあるはずである。それだからこそ、なおさらに危うく思うのが、ドグマティズムのもとで軽快に語られる、前世や来世を实在視する意見なのである。

(続)



連載小説◆負けるな！よっちゃん2  
52

## 《ヒマラヤへの道 21》

### ガラムツシユ峰 ⑬

梵店主

我々の監視と護衛をする為に長期間行動を共にしているパキスタン陸軍将校をリエゾン・オフィサー略してリエゾンと呼び合っていた。彼は士官学校を出てよっちゃんたちと同世代であった。体格は大きい、軍人とは思えないような優しい心根を持つ繊細な文学青年と表現したくなるような賢い人間であった。

下山のキャラバンをはじめて3日目の

朝、テントをたたみ荷ごしらえをして出発前の休憩をしていた時に、突然、リエゾンが雪豹を見つけた。「スノー・レパード」と言いながら彼の指差す山稜を見上げる。と、岩稜の中に白と斑点模様が見えた。雪豹は、じっとして動かない。リエゾンは、よっちゃんに「心配はいらない、雪豹は夜に家畜を襲う事はあるが、人を襲う事はない。」と真面目な顔つきで言う。

しかし、よっちゃんは、豹と聴いた瞬間、好奇心よりも恐怖心が強かった。ここは動物園ではない。ヒマラヤの奥地である。我々には2頭の馬もいる。豹にとっては得がたい餌に見えるかもしれない、と心配になってきた。

雪豹が馬を目がけて駆け下りてくれば、あつという間によっちゃんたちの処へ来るだろう。どう猛な野獣を追い払う術をよっちゃんたちは持っていない。ピッケルを振り回すぐらいが精一杯の抵抗である。こんな事を考えてると、リエゾンが来てよっちゃんに大きな声で「心配要らない、私に銃をもっているから」という。

あつそうだった。彼は軍人だったのだ。普段は大事にリックの中にしまっているから見えないが、大きな銃を持っていたのだ。よっちゃんはテントの中で見せてもらったことがある。大事そうに布切れに包まれた銃は重く油臭かった。毎日の手入れを彼がしているのだと感心した。銃弾も磨かれていた。

リエゾンに護られていると思うと、雪豹にたいする恐怖心が消え、珍しい動物に出会えた幸運をありがたく思えてきた。

ヒマラヤの荒涼たる岩山に見かける野性動物はたまに空を飛んでいる鳥ぐらいで、地上では何も見かけなかった。草木も生えない大地には餌になるものが何もないから、野生動物がいらないのもあたりまえである。豹のような肉食動物が生きていくためには相当に広範囲で狩をしなければ獲物にありつけない。この渓谷を縄張りになっているのも、あの雪豹だけかもしれない。

雪豹は、ゆっくり山の稜線づたいに歩き姿が見えなくなつた。よっちゃん、消えた雪豹がまた現れるのではないかと空と山の空間に目を凝らしていたが現れなかった。隊長の「もうええやろ、出発するで」という声で皆がリックを担ぎ出した。

ヒマラヤの雪男が時々話題に上るが、岩陰に隠れて雄たけびをあげる雪豹の声を雪男の声だと勘違いしたとか、雪原に残る大きな足跡も、もしかして雪豹の足跡が溶けて大きくなって、雪男の足跡のように見えたのかもしれない。あの雪豹は、神聖な山の神の使いを感じさせる風貌であった。

## フキ味噌

里で採れるフキノトウの時期はとつくに終わり、四月下旬ともなれば、標高千メートルの山のなかでしか採れない。

五月に入って、飯山市の隣村、木島平に向かった。快晴、空気は少しかすみがかっている。中野市から標高が上がるにしたがって、遠くの景色が見渡せるようになり、飯綱、戸隠、黒姫、妙高の諸山が、雪の残る貌をあらわす。背後の新潟に連なる山々はいつそう白い。

長野市の家を出て一時間ほどで木島平に着いた。谷にはところどころに残雪が埋まっている。3メートルを超える大雪の汚れたなごり雪だ。

知人宅に鯖寿司を届けて、フキノトウを採りにでかける。小一時間ほどで、二つの竹籠一杯になつた。豊作だ。

今年のフキノトウは昨年と違って、苦みがしっかりある。うまいフキ味噌ができらるだろう。

知人のログハウスで、採れたてのフキのお浸しをつまみにビールをいただく。俺の鯖寿司は大好評だ。さあ、帰ってからフキ味噌づくりに取りかからねば。

このときはいつもながら憂鬱になる。フキに付着したゴミや土を取りのぞかなくてはならない。これがたいへんな作業なのだ。俺のつくったフキ味噌を待ちのぞむ人たちよ、心して味わえ。(猿)

便所掃除

広い意味で、自分がしあわせと思える暮らしが出来ることと表裏一体だと思ふ。

昔からよく言われることだが、妊娠中の女性は便所を掃除すると器量良しの子供が生まれるといつて、お便所は不浄な所という観念を持つて、誰もが掃除することを嫌がったものだが、美しい子供が生まれるのならば、と思つて進んでやつたことを思い出す。

スーパ一、デパートなどでは専門的にやつてくださる人がいて「きれいな便所」と感謝する気持ちが起こる。

リンカーンの言葉

アメリカの大統領リンカーンのところへ、ある人が友人を紹介して就職を頼みました。するとリンカーンがあつさり断つてしまいました。「なんで」とたずねると、リンカーンは、

「人相が気に入らぬ」

と答えました。そこで友人が、

「人相は親が生んでくれたもので、彼の責任ではないでしょう」

と言いますと、リンカーンは

「人間四十歳を過ぎたら、自分の顔

に責任を持つべきだ」と答えたという有名な話があります。

その人の日々の行いや考え方が、顔の相にも影響を与え、知らぬうちに人相を変えてゆくものらしい。

一言も話をしなくても、その人の顔を見ただけで気持ちが悪くする人があります。そういう人相が第一なりといえます。その人の顔を見ただけで、心の苦しみや悩みが溶かされてしまう。

草木が美しい花を咲かすように、人間もきれいな顔を咲かせねばなりません。ただ目鼻の整つた外形の美が良いとはいえない。虫も好かない顔もある。

人間が他の動物と違う所は、他の動物は働くことを知らない。人間は働くことを知っている。他の動物は言葉を使わないうが、人間は言葉を持っている。

又、人間だけが笑ふことを知っているとする、いつも笑いを忘れぬことが、人間らしい生き方。又、健康につながる。頭を悩ませる昨今である。

排泄について

「尿もれ」だけでなく、大小いづれにせよ、これに関しては困っている人が多いのではないか。排泄のトラブルは病気の一つだと云えば、その通りだが、その悩みを持つ人は、どんなにか辛いだろうと思う。私の場合も、二、三回あつたと

思う。

同じ年齢の友が「私は子宮がさがつて下から出てしまう」と話していたことがある。

私は、そういうことはなく今日まできたが、大にしろ、小にしろ、別に異常はない。おそらく、それに関しては食生活がうまくいっているのだと思ふ。

多くの高齢者は、そんな事に悩まされながら一人で耐えているのだと思ふ。特に排泄については、友人たちと楽しい時間を過ごしている間にも尿もれの症状をもっている場合があると思ふ。

対処できる時代である。おむつ、パツト類もよい機能を持ったものが出ている。多少の排泄の障害があつても元氣を出して歩こう。



俳句

土田 裕

うなだれて人待つさまに君影草  
街をゆく乙女の美しき薄暑かな  
木陰ばかり選びて歩く立夏かな  
土つけて筍つつむ新聞紙  
遠き日や摘みては食みし草莓

藁女

大牡丹今年は二つの開花待つ  
日本たち二度目の花見やソオル街  
花風吹紙風船うつ母娘  
玉葱の白きをいたためて食卓へ  
春の月淡き影や黄砂かな

編集後記

「義兄とその家族」を本にする準備をしています。ご期待ください。  
今後は読みやすい8ページを基本にして発行していきます。

『人気のデザイン』

着物から服を仕立てます

梵~ぼん~